

# 戦犯者たちの生き甲斐

サービス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

感染者系の作品とのクロスです

21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話 side シアトル	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
75	71	66	62	58	56	53	50	48	46	43	41	37	33	27	22	19	16	13	9	1

目次

# 1話

ある晴れた日、山の中を歩く男女の影があった

「ねえジョエル何処に行くの?」

「言っただろう、エリー買い物だ。」

「買い物って…」

まるで親子の様に語らって居る二人、ジョエルと呼ばれた男の言葉に

エリーは顔を歪める。

何処かの集落や町の中ならともかく、こんな人里離れた山の中で店があるとは思えない、あつたとしても碌なものなど売ってないだろう。

そんなエリーの様子を見てジョエルは笑う

「心配するな、もうすぐ着く絶対に氣にいる筈だ。」

「どうだか…」

「あつたぞ、あそこだ!」

ジョエルが指を指しながら走りだす、示した方を見ると妙な看板が立て掛けられた洞窟があつた

「何…あれ…?」

「言っただろう、買い物が出来る店だ」

(絶対ウソだ)

恐らく揶揄われたのだろうがそれにしても此れはヒドイ

エリーはしばらくジョエルとは口を効かないと心に決めた

「おーい、何してるんだエリー?置いていくぞー」

そうこうしている間にジョエルは洞窟の中に入っていく

「もういいって、からかってるんでしょバレてるから」

そう言々とジョエルは苦笑する

「ウソじゃない、此処の店に来たのはまだ二回目だがジャクソンに来る前は同じ系列の店を何回も利用した事がある、俺が知ってる中で

最も品揃えは良い店だ」

「だからもういいって…」

エリーは完全に白けてしまった、楽しい所があると聴かされたのにこれは無いだろう

「わかった、じゃあもし嘘だったら晩飯のステーキはお前にやるだから入るだけ入ってみろ！」

ジョエルがにこやかに叫ぶ

その様子を見てエリーは渋々ジョエルの後を追う

「ウソだったらマジで貰うから」

膨れっ面になりながら洞窟の中に入ってくるエリー

「ああ、約束する」

ジョエルはそれを見て頷いた

「すごい！ナニコレ?!」

洞窟の中はまるで別世界だった

入口付近こそ看板以外何も無いが奥に入ると様々な店がある

武器、弾薬はもちろん、食料や酒、果てはお菓子やおもちや本まであった

ここまできると店と言うよりショッピングモールだ

「えーとちよつと待ってるよエリー、おーい商人居るんだろー買い物に来たぞー出てこーい」

辺りを見回しながらジョエルが叫ぶと、地面の下からガチャンと音が鳴る

「ヒツヒツヒツ、久しぶりだなストレンジヤー」

「…え、何コイツ？」

土の中にあつたハッチから出てきたのは全身を布で覆い尽くしたわけのわからない奴だった

「ヒツヒツヒツ、コイツとは随分な言いようだなストレンジャー」

「エリー、コイツが此処の店を指揮つてる商人だ」

「商人つて奴隷商人かなにか？」

「ヒツヒツヒツ、失礼だな、まあ確かに俺たちの前のボスはアメリカ大統領の娘を拐つたりしたが、俺たちは真つ当な商人だ」

「なんか今凄い事言わなかった!？」

「とんでもない爆弾発言にツツコミをいれるエリー」

「おいおい、あんまりコイツを揶揄わないでやってくれ、第一そんな事件が

あつたなら一大ニュースになってたはずだぞ」

「ヒツヒツヒツ、すまんすまんでは商売を始めるとするか」

「すごい!すごい!!恐竜大百科に大宇宙図鑑!!もう殆ど残ってない本が沢山ある、あつ!!本だけじゃなくて映画もあるよ、ジョエル!!」

「何?!前来た時はなかったぞ!」

「ああそれか、以前別の場所で商売した時に注文を受けてな、取り寄せたは良いが客が取りに来なかったんだ。いつまでも置いていても邪魔だし欲しいなら格安で売るぞ。」

「買おうジョエル!」

「ああ!!買った!!」

「ヒツヒツヒツ、まいどあり」

以前自分達は死んだも同然だった、

ロス・イルミナドス教団の教祖や幹部達に命令され消耗品の様に扱われる日々

通常のガナード達よりも弱くそれこそ通常の間人何ら変わりない力しか持っていなかった

与えられる仕事は雑用以下の仕事ばかりだった。

そんな自分達にも転機がやってきた、商人として外部のものを取り引きをし教団の資金や武器を調達しろと言うものだった。

幸い自分達は肉体こそ通常の間人と同程度のスペックしか無いが知識や取引に置いては他のガナード達よりも秀でていてと自負していたし、此処で活躍し結果を出せば教団内での地位も向上すると考えたからだ。

断る理由などない、自分達は二つ返事で了解の意を示した。

そこからは激動の日々だった外部の犯罪組織の弱みを握り格安で武器を調達しそれを高値で売り払い資金を得る、時には教主サドラーが敵視していたアメリカに潜り込み協力を得ることが出来そうな人物を捜したりもした。

そしてついに外部組織のエージェントとコンタクトを取ることに成功した。

嬉々としてその情報を伝える、これで自分達も報われるとそう思った。

次の言葉を聞くまでは…

出来損ないにしては上出来だ

キレた、何言ってるんだコイツと思った、なんでこんな奴に認めて貰おうと思ったんだ俺ら、よし反逆しよう、そう決めた。

幸い自分達が接触したエージェントが大統領の娘を攫うみたいないない事だったし目撃情報を流して教団潰して貰おうと思った。

大統領の娘攫われたんだから腕の立つ奴が何人か来るだろうし、もし武器が足りないなら支援しよう、それで万事解決だ!!

そう思っていた時期がありました…

アメリカからのエージェント人数一人

大統領は娘を助ける気は無いのだろうか？

確かに少数精鋭で行くのは定石だろうがそれにしても一人、しかも早々にとっ捕まってプラーガ仕込まれた。

何やってんの!?! 助ける気あるの!?!

仕方ないので予定より早めに武器の支援を行う事にした、せめてもの腹いせに金は取るが

しかしそつからは凄かった、いやまあ途中途中危なかった所はあったが、それでもあの男ほぼ一人で教団を潰してしまった。

よかったねお嬢ちゃん、キミのパパちゃんと助ける気はあつたみたいだよ。

教主サドラーが倒れ俺達は自由を手にした。

望んでいた自由を手にしたはいいが新たなる問題が出てきた

簡単に言うとな暇なのだ

いや、勿論商人としての仕事は続けている、しかしなんというかわり甲斐がない

幸い金だけは教団の金庫やエージェントから売られた金銀財宝やらがあるのです、

正直一生遊んで暮らせるのだが、それでも何か満たされない

仕事の都合上あらゆる国に行き、さまざまな体験をしたがやはり心は満たされない

ルームニアで出会った恰幅の良い友人に相談してみた所こんな事を指摘された

「貴方が求めているのはお客様からの感謝の心と言葉なのでは？」  
青天の霹靂だった。



そうだあのエージェントからは確かにぶつきらぼうながらも感謝の意を感じた！

ありがとよと小さい声ながら社交辞令ではない心からの感謝を!!  
だがそれがわかったところでどうなる、アレはあの様な極限状態だからこそ生まれた関係だあの様なシチュエーションあの様な人物だからこそ生まれた絆だ。

自身の求めているものはわかった、だがわからない方がよかった。  
二度と手にできないものを求めているとわかった所でなんになる？

(死のう..)

俺は死に場所を求めた。自由を得たところで自分は所詮ガード、家畜なのだ

仲間には伝えないこの残酷な真実を求めているものは手に入らない事を

フラフラと酒瓶を片手に歩いていると洞窟を見つけ、ちょうどいい此処で死のう

奥に進んでいくと妙な扉があった、いや扉と言うよりも門に近い大きさだ。

近づいてみると体が扉の向こうに吸い込まれそうになる。

何なんだこれ？扉型BOWか何かか？

まあ別になんでも構わないどうせ死のうとしてたんだ..

俺は扉に向かって歩き出した。

(まさかこんなファンタジーな体験をすることになるとは)

そうアレは違う歴史を辿った世界に通じる扉だったのだ

しかもかなりとんでもない事になっている世界へ

これは運命、いや自分達に与えられた使命だと思った。

そうと決まれば話は早かった、仲間達に声をかけ必要なものを徴収しその世界のさまざまな場所に人材を派遣した。専用の通貨を作り

取り引き相手のニーズに合わせた商品を用意した。

上手くいかない時もあった、感染者に襲われた時もあった、暴徒達に商品を狙われた時もあった、しかしやり遂げた、自分達は成し遂げたのだ。

「ジョエル、最高だったよ連れてきてくれてありがとう!!」

「そうか、じゃあまた金が貯まったら何か買ってやるよ。」

エリーの言葉にジョエルは優しく微笑んで答える

「店の人もありがとう!! 奴隷商人なんて言っでごめんね!!」

「ヒツヒツヒツ、良いつてことよまたのお越しを」

そう言うのと商人ふと思いついた様に何かを取り出しエリーに向かって投げる

「嬢ちゃん!!」

「えっ? わわ!!」

咄嗟にキヤツチするとそれは瓶だった中には黒い液体が入っている、コーラだ

「初回サービスだ、受け取りな」

それを聞いたエリーはにこやかにもう一度言った

「ありがとう!!」



## 2話

「へエ〜、やっぱりジャクソンの人達の間では有名なんだあの人」

「ああ、俺だけじゃない、トミーやジェシー達も利用してる」

例の店で買い物を行った翌日エリーはジョエルに例の店の話を聞いていた。

何でもさまざまな地域にある洞窟や廃墟、地下施設などを拠点として商売をしているらしい、スタッフは一つの場所に四、五人程、支払いは彼らで作った独自の通貨で取り引きするらしい。物などを売ったり彼らに頼まれた仕事をこなすなどをしたりすると金を貰える様だ。

「でもアレだけの物資をどうやって仕入れてるんだろ？」

「さあな、俺も気になったが企業秘密の一点張りだったよ、昔テスと仕事してた時にあいつの物資の出処を探ってた奴らもいたが結局は無駄に終わったしな」

「ふ〜ん？」

ジョエルの発言にエリーは不思議そうな顔をして返事をする

「ジョエルの所には来なかったの探りの依頼？」

何気なく聞いて見るとジョエルは微笑えみながら口にした

「ああ、来たが断ったよ」

「何で？」

「メリットが無いからだ、敵対すれば商品売って貰えなくなるし、何よりあいつらの店の周りに居る感染者を倒したり、そこら辺にある鉄屑を持っていけば金を払って貰えるんだ敵対する理由がないだろう？」

「確かに・・・」

ジョエルの説明にエリーは納得する

「実際ジャクソンの住人もこの辺りにいる感染者を、見回りの時に倒してるだろう、勿論安全の為に言うのが一番の理由だがその時身体の一部を倒した証明に持っていくと買い取って貰えるんだよ。まあ、大した金額じゃないが食料代や弾代にはなるからな。」

「成る程ね。」

エリーは頷く、それと同時に安堵した、この前一緒に見回りに出たジェシーやディーナが嬉々としてランナーたちの指を切り落としていたのにはそう言った理由があったからなのだと、決して危ない思考の持ち主ではないのだと。

「でもそんな風にして儲かっているのかな、商売のことはよく知らないけどそんなんじゃないや儲けなんて殆どないんじゃない?」

エリーが聞くとジョエルも頷く

「俺も気になって聞いてみたんだが、別にこれで儲けるなんて考えてないから構わないと言ってたよ。何でも別口の商売で山程稼いだからいいんだそうだ」

「何それ?」

エリーはその言葉聞いて呆れた、欲がないにも程がある。このご時世には中々珍しいタイプの人間だ

実際には極限状態にいる人間達と取り引きしたいと言う欲がないどころか色々とぶつ飛んだ人外達なのだが、そんな事知るよしもないエリーにとつて商人達は酷く御人好しな集団に思えてしまった。

(今度買い物する時は何か持って行ってあげよつと)

そんな勘違い少女エリーが思考を巡らしていると、何やら騒がしい音が聞こえる。どうやら家の外で子供達が騒いでるようだ

「何、なんのさわ..:」

注意してやろうと扉を開けるエリー、だが言葉が途中で止まる

「おい、どうしたんだ?エ..: リー..: ?」

気になったジョエルが声をかけてみるが、同じように言葉失う、その原因は外の光景にあった

「スゲ〜、ジェシーカッコイイ!!それサムライイって奴だよね俺初めて見た!!」

「ホントホント!!その鎧と剣もカツコイイ!何処にあったのそれ!」

「イツイヤ、俺もよくわからないんだ?見回りの帰りにいつもの店に買い物に行ったら渡されて!」

そこには戦国武将の甲冑に身を包み刀を腰に挿すジエシーがいた、デイナーは地面に蹲って口元を押さえている。

「何、アレ?」

「さあ?何だろうな?」

彼らは知るよしもない、商人達が仕入れた情報にアメリカ人はサムライとニンジャが好きだと言う情報があったこと、仕入れたは良いが売れなかったこと、仕方ないので同じアジア系のジエシーに着せて宣伝を行なったこと

「ねえジヨエル。」

「何だエリー?」

その光景を見たエリーがジヨエルに言う

「やっぱりアイツって変わってるね」

「ああ、そうだな」

ジヨエルは苦笑いで答えた



### 3話

ジェシーのサムライ騒動からしばらく経ったある日の事、ジャクソンの町に商人達から連絡が来た、何でも巡回する範囲内にある建物に感染者が住み着いていたらしい、しかもただの感染者ではなく特別凶悪な個体、ブローターだ。

「それは本当なのかしら?」

「ヒツヒツヒツ、ああ間違いないぜ m r s マリア、とんでもないデカさの感染者の影が見えたからな、ブローターでないにしてもまず厄介な奴だろう」

商人の言葉にマリアと呼ばれた女性は言葉を失う、ブローターは感染者達の中で最も強大な個体だ、そんなものがこの町に来たらひとたまりも無い、武装した軍人が数人係でもやられる可能性があるのだ。増して自分達など...

「俺が行こう」

座りながらその話聴いていた男が立ち上がり発言する。

「トミー貴方!」

「俺は此処にいる誰よりも戦い慣れてる、ブローターと戦うのだから初めてじゃない、やってみせるさ。」

トミーはニヒルな笑みを浮かべて、その場にいる全員を安心させるように話す。

「それなら俺も行こう。」

「ジョエル!」

ジョエルの発言にエリーが叫ぶ

「俺だってブローターとは何度か対峙してる、俺とトミーならまず殺られることはないだろう。」

「ジョエル...」



トミーを心配するマリア気遣う様に自分も行くと言うジョエル

「だったらアタシも行く!!」

「俺も行くよジョエル、トミー少しでも戦力はいるだろう?」

「わたしも役に立てると思う。」

その場にいる見回り組に参加している若者3人が全員志願する。

「わかった、ただし建物の中に入るのは俺たちだけだ、お前たちは外で他の見回り組と一緒に感染者が近寄らないよう見張っててくれ。」

ジョエルのその言葉にエリーが反論する

「なに言ってるの!?アタシも一緒に戦うよ!それに中にいるのはブローターだけとは限らないんだよ!ジェシーの言う通り戦力はあつた方が良いでしょう!!」

「だからこそだ!!狭い建物の中を大人数で入った所を襲われれば全滅する可能性がある!味方の発砲で負傷者や死者がでるかもしれない!だからこそ俺とトミーの2人組、少数精鋭で行くべきなんだ!!」

「でも!!」

「2人とも!落ち着いて!!」

いい争う2人をマリアが仲裁する

「今は争ってる場合じゃない、どうやって脅威に立ち向かうか考える時でしょう?それに他にも問題があるわ。」

そうブローターと誰が戦うかの問題の他にも、まだ問題がある。武器の火力だ。

ブローターはその身体をキノコのような菌に覆われている、その菌は鎧の役割を果たし生半可な武器では倒す事はできない。

「幸い弾薬は商人達のおかげで余裕はあるけど、それでもやはり不安は残るわ。ブローターも一体だけとは限らないし。」

室内の空気が重くなる、今ジャクソンの町にある武器の中で最も火

力があるのはショットガンだ。もしブローターが一体以上いた場合  
倒し切れるかどうか…

「ヒツヒツヒツ、すまないが俺のことを忘れてないか？さつきから  
会話に入れないんだが？」

全員が商人の方を見る、そして全員が一気に顔を明るくさせた

「そうだ！商人！何かいい武器はない!?奴らを一扫できるような強  
力な奴！」

「ああ、あるぜ大量にな。」

「ならそれを…」だがな。「えっ…。」

商人の一言にエリーが言葉をとめる

「それなりの金は取るぜ、俺も商人だからな、無料って訳にはいかな  
い、奴等を一扫できる武器となると弾込みで一丁50万って所だな。」

その言葉にエリー達は再び顔を暗くし俯く。

見回り組が1度の見回りでランナーなど感染者達の一部を持って  
行つてほしい200程、そこから食料や弾薬などの支払いなどを差  
し引くと手元に残るのは1割以下、しかも毎回感染者に遭遇するわけ  
ではないのだ、当然儲けもない時もある。

そんな彼らの顔を見て商人は再び口を開いた

「ヒツヒツヒツ、そんな顔をするな、要はブローターを始末出来れば  
良いんだろう。だったらこんな武器なんかよりももっと安く、適し  
た物があるだろう。」

「えっ!!」

その言葉エリーは顔を上げる

「まあ、待ってる元々その商品売りに来たんだから俺は。」

## 4話

ジャクソンのとある巡回道に在る廃ホテル、その中から叫び声が響き渡る。

「ギイイイイ!!!」

「アアアアアアアア!!!」

それはとても人の声とは思えなかった、いや、実際最早人ではない。菌に侵され理性を失い怪物となってしまうた感染者達だ。彼らは獲物を求めてその場を徘徊する、いつの日か完全なる菌になってしまうその時まで。

「フー!フー!... エッツ!?」

その中の一体が何かに反応する。すると建物入り口から何かが入って来た。

ガチャン! ガチャン!

「!!!」

音に反応した感染者達が一斉にそちらに向かう。それと同時に音を立てた本人も外に向かって走り出す。

「ガアアアア!」

「エツ!エツ!アアア!」

叫び声とも威嚇音とも取れる音をたて、外に飛び出した感染者達、そして。

プシューー!!

そこで彼らの意識は途絶えた。

「なんか、必死になって対策考えたのが馬鹿みたいに思えてきたアタシ。」

「そんな事言わないで、上手くいったんだからよかつたじゃない。」  
思いつきり肩を落として項垂れるエリーをディーナが慰める。

「でもまさかこれが本当に効くとは思わなかったわね。」  
「うん、まあそうだね。」

彼女達は自身の手に持つそれに視線を落とす。商人から売買したそれは何てことない代物だった。

「除草剤噴射機って、まあ確かにあいつら菌だけどさあ!!」  
理屈としてはまあわかる、ただ何というか納得がいかない、今までの苦労は一体何だったのだろうか？数少ない弾薬でやり繰りし、弾が尽きたら近接武器で戦う、そんなことをしてやってきたと言うのにもうもアツサリいつてしまうとなんか釈然としない。

「おい、其れより何で俺はまたこの格好にさせられたんだ？囿をやるにしてももつと動きやすい服装でも良いだろう?」

「それは商人のリクエスト。」

余談だがジェシーは再びサムライの格好にされていた。噛みつかれても此れを着てれば大丈夫だ、だから着てくれと押し切られた。しかもマスクも鎧に合わせたデザインにするという無駄なこだわり。

「よし!!大分片付いたぞ!!生き残ってる奴らもほぼ虫の息だ!」

大人達が除草剤を浴びせながら報告する

「だが肝心のブローターが居ないな...」

報告を聴いたジョエルが呟く、そう倒れているのはランナーやクリッカーのみで最も脅威となり得るブローターの姿がない。

「やはり、ホテルの奥に入り込んでしまったか。」

「ああ、いつまでも窓の近くに座り込んでちやくれなみみたいだな。」

商人の話では窓に巨大な感染者の影を見たと言っていた。しかし当然ながらブローターは同じ場所に留まりはしない、生き物である以上常に移動するのだ。

「やはり中に入るしかないか。」

「だな。」

ジョエルとトミーはマスクを着用して中に入る準備をする。

「おいお前ら、もう全員片付けだろう?それを貸してくれ。今から俺とジョエルで中に入る。」

トミーは近くにいる者から噴射機を2つ受け取りそのうちの1つをジョエルに手渡す。

「これでよし、銃も弾薬も充分ある、それじゃあこれから俺たちは中に入るもし何かあれば商人からレンタルしたトランシーバーで報告するから宜しく頼む。それじゃあトミー行くぞ。」

「了解」

そう言つて2人はホテルの中へ入つていった。

## 5話

暗い胞子が飛び交う建物の中を照らす明かりがあった。

「しっかし外は真っ昼間だつてのに随分と暗いな。」

1つはトミー、緊張をほぐすためか話題を振る。

「まあ、天井が崩れて瓦礫で光が届かなくなった箇所ができたんだろう。そうでなくてもホテルなんて窓がある部屋なんか、客室やレストランくらいだろう。」

もう一つはジョエルだ、ふられた話題に対して特に考えず答える。

「それにしてもだ、」

そしてもう一つは…

「何でお前までついてきたんだ？」

「ヒツヒツヒツ、気にするなストレンジャー。」

商人である、

「お前まで来る事なかっただろう、武器も連絡手段も用意してくれただ、着いてきてくれるのは頼もしいが、これ以上何かされても返せる物がないぞ？」

「ジョエルの言う通りだ、今からでも遅くない、外に出た方が安全だぞ。」

2人は商人に対して外に出るよう促すが当の本人は全く歩を緩めない

「心配するな、自分の身は自分で守る足は引つ張らない、俺のことは気にせずやるべきことをやってくれ。」

そう言う商人さらに歩く速度を速める、何なら2人よりも先に前を歩く勢いだ。

「一体どうしたんだろうな？商人の奴…っておい？ジョエル？」

「ん？…ああ、何でもない、そうだな。」

様子のおかしい商人に、ジョエルの意見を聞こうとするトミー。しかしジョエルも何か考える素振りをしていた。

「どうした？何か心当たりがあるのか？」  
商人の行動に思い当たる節があるのか聞いてみる。するとジョエルが話し出す。

「昔、まだサラが生きていた頃の事なんだが…」  
サラとは亡くなったジョエルの娘である、彼が言うにはまだ世界がこのような事になってしまいう前、シヨッピングモールで買い物をした時に言ったらしい”サラに欲しいものがないか？あるなら買ってあげるぞ？”と…

「そう言った時のサラが丁度今の商人と同じような状態だったんだ。」

それを聞いたトミーは、物凄くビミョーな顔をした。

「つまりアイツは今何か欲しい物があつて、それが手に入りそうだからあんな風になってるのか？」

「わからない、あくまで俺の想像でしかないが…」

そんなこんなしている間にも商人は更に奥へと進もうとする。

「おいおい、何をしてるんだストレンジヤーズ？早いとこ済ませようじゃないか、なんだったら仕事終わりに一杯奢るぜ、ヒツヒツヒツ、」

やはり明らかに上機嫌だ。

「なあ、商人お前何かおかしくないか？さつきから妙に浮き足たつてるが？」

すると商人の動きが止まる。

「……………」

「おつ、おい？どうした？」

「し、商人？」

急に黙り込んだ商人に少しビビりながら話しかける2人。すると

「ヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒー！！」

堰が切れたかのように笑い出した。

「どうしたどうした!?!」

「おい!?!静かにしろ！急にどうしたんだ!?!」

2人が若干、イヤかなり引きながら商人に黙るよう促す、しかしマ

スクを着用しているため口を塞げない、とりあえず落ち着かせる為に話を聞く。

「やつとだ…」

「は？」

「やつと理想の場所を見つけた。」

訳がわからんと言った2人に商人は語る。

「今まで洞窟だの廃墟だの下水道だの、そんな所ばかり拠点にしてきた。それが悪い訳じゃない、だが客商売をする以上衛生面は大事だ。だからここは良い！今はまだボロボロだがこれぐらいなら修繕可能だ!!洞窟は倉庫としてここを店舗にすれば誰に魅せても恥ずかしくない店になる!!」

そう彼は、いや彼らは求めていた、此方の世界における正式な自分達の拠点を、そしてとうとう見つけたのだ、理想の場所を…

「さあ!!急ぐぞストレンジャーズ!!時は金なりだ!!これからやるべきことが沢山ある!とつとと終わらせて改修清掃に取り掛かるんだ!!」

そう言つて商人は火炎放射器を片手に奥へと進んでいった。

「…行くか…トミー…」

「…ああ…」

なんか一気に疲れた。そう思う2人だった。



## 6話

(オイ、ストレンジャーズ、ストップだ。)

先程まではまるで子供のようにはしゃいでいた商人が急に足を止め呟く。その切り替えの速さに少し呆気を取られるも、ジョエルとトミーは直様商人の言いたいことを理解した。

(ブローターか…)

薄い壁一枚を隔てた向こうからドスン！ドスン！と、何が歩く音がする、床の軋み音から見てかなり重量感のある足音だ。ブローターで間違いないだろう。

(オイ、どうする？除草剤を浴びせようにも奴は壁の向こう側だ、迂回しようにも向こう側につながる道が無事であるとは限らん、ここは音を立てて奴を誘き出そう。)

商人とジョエルの2人にトミーが提案する、感染者達はその身に宿る菌が成長すればする程視覚を失い聴覚頼りになっていく傾向がある、ブローターも厄介な個体ではあるが例外ではない。今のよういきちんとした対策を行なっていれば気づかれたところでなんのことはない対処可能だ、ジョエルもその案に賛成する。

(ああ、わかった。なら壁から少し離れるぞ。勢いよく飛び出してきたところを巻き込まれたら怪我じゃ済まない、距離をとって一気に除草剤を浴びせてやろう。)

そして2人は壁から離れていく。

(おい商人、どうしたんだ?)

しかし商人はその場を動かこうとしない、それどころか腕を組んで此方を睨んでいる。

(ど、どうしたんだ?)

(何やってんだ商人!?早く来い!離れるぞ!)

(ヘイ、ストレンジャーズ、俺の話聞いてなかったのか?)

2人を睨んだまま商人は語る。

(ここはようやく見つけた理想の場所だと言っただろう？それなのにブローターに壁を破壊させる？いくら後から直すとはいえ材料や人材もタダじゃないんだ、損傷箇所は少ない方が良い、俺は絶対に反対だ!!)

この後に及んでまだそんなことを言っている商人にジョエルが絶句し、トミーが静かにキレる。

(なに馬鹿言ってるんだ!?化け物がいる状態で修理もクソもないだろうが!!奴を倒さない事にはこの建物だって安心して使えないんだぞ!!)

(そんなことは解ってる!しかし後の事も考えるのが商人と言う者だ!!大体ブローターを音を立てて誘い出してみろ!必要以上に暴れて建物を穴だらけにするに違いない!!ここは迂回して不意をつくべきだ!)

「いやだから道があるかどうかわからないから誘き出すんだろう!!あるかどうかかわらん物より確実な方法でやる方が合理的だ!!」

「合理性だけでは商売で成功できん!むしろ少ない可能性に賭けてこそ新たな道「グオオオ!!」「グアパア!!」

「商人ンンンン!」

興奮しすぎて声のポリウムが上がっているのに気づかずブローターにぶつ飛ばされる商人。思いつきり飛んでった後地面に身体を叩きつけられたもの問題ないと言わんばかりに起き上がり手を振る。

「こんな事もあるうかと用意して置いた軽量ボディーアーマーサムライverだ!本来なら5万のところを今なら「馬鹿言っただけで逃げろぞ!」了解!!」

プシユー、プシユーとブローターに除草剤を浴びせながら走る2人、しかし

「クソツタレめコイツ除草剤が効かないぞ!?!どうなってやがる!!」

「ゴアアアアアア!!」

此方に迫ってきながら叫ぶブローター

「いや…」

しかし商人が敵を指差し指摘する。

「効いてはいるようだぞ？少し足元がおぼつかなくなってきた。おそらく後もう少し何か攻撃を与えれば決定打になりそうだ。」

「だったらコイツだ!!」

そう言つてジョエルは背中に背負っていたショットガンを構える。

「これで終わりだ！化け物!!」

ドオオン！ドオオン！ドオオン！

「グオアアアアー!!」

最後の雄叫びとばかりに声を張り上げるブローター、フラフラと辺りを行ったり来たりした後、膝から崩れ落ち床に倒れた。

「終わったな。」

「ああ、だがまだ中に感染者がいるかもしれない一旦引き返つてまた後日中を調べてみよう。」

「だな。今日はもう疲れたよ。」

「ジョエル！トミー！」

外に出るとエリー達が全員、心配そうだった顔を明るくして近寄ってくる

「大丈夫だったの？ブローターは？退治できたの？」

エリーがそう聞くとジョエル達は頷く。

「商人の言つたとおりデカイのが1体いた、とりあえずそいつは倒せたがまだ中に感染者がいるかも知れない、また後日入って調べてみようと思う。」

「ああ、そんな時は商人、もう一度トランシーバーをレンタルさせて欲しいんだが…？商人？」

ふと後ろを振り向くと商人がいない。

「おい？アイツどこに行ったんだ？まさか感染者に!？」

「オーイー!!俺ならここだ!!ストレンジャーズ!!」

建物の上から声が聞こえてくる。上を見上げてみると最上階の窓から手を出す商人がいた。

「少しここに用事があったてな！先に帰っててくれ！何なら俺達でこの建物を掃除しておく。そうだな、3週間後ぐらいにここに来てくれ！レンタルした物はその時にでも返却してくれば良い！それじゃあな！」

そう言うと商人は建物の中へと消えていった

「なんなんだ？」

「どうしちゃったの、商人のやつ？」

エリー達が疑問に思っていると、ジョエル達は

「色々あったんだ…色々とな…」

疲れた顔でそう言った。

その日の夜

「ヒツヒツヒツ、さあ掃除を始めろぞ！」

ガシャン！ガシャン！ガシャン！

「ヒツヒツヒツ、お前たちの鎧なら感染者達にも破壊され無いホテルの掃除はあらかた済んだからな、他の店も掃除して置こう。」

ガシャン！ガシャン！ガシャン！

「ピッピッピッ、さあ忙しくなるぞ。」

## 7話

一連の騒動から3週間、アレから色々あった。

例の廃ホテルから商人が以前ジャクソンの町から出ていったカップルを変わり果てた姿で発見し、その2人の最後の様子が書かれた手紙を町に届け、それを見てジョエルとエリーがいい争いになったり、ジェシーとディーナのカップルが別れたりなど、さまざまな出来事があった。

そしてその日の朝早く、エリーは馬を連れて町の外に出ていた。背中には食料や弾薬などが入ったりリュック、そしてライフルが背負われている。

(ジョエルは何か隠してる、ファイヤフライの本拠地に行けば何かわかるかも知れない…)

そう、エリーは町を出て行ったのだ誰にも言わず、たった1人で…理由はジョエルとの口論が原因だった、エリーには一連のパンデミックを引き起こした菌に対して免疫があり、その特異性からファイヤフライに協力してワクチンを作る為にジョエルと旅をしていた。しかし目的地にたどり着いたは良いが、エリーは気を失っていた為詳しい詳細を知らず目が覚めた時にはジョエルと共に車に乗っていた。

(ジョエルはファイヤフライはワクチンを作るのを辞めたって言うてたけど信じられない…)

真実を知る為エリーはファイヤフライに向かう為町をでる事にした。

(前の時とは違う、ジャクソンからなら馬を使えば一カ月もかからずにいける。)

エリーがそんなことを考えていると。

ドゴオオオン!!ドゴオオオン!!ドゴオオオン!!

何やらとんでもない爆音が山全体に響き渡る、思わず体をビクツ!!と硬直させるエリー、手綱を抑えられてる愛馬のキラリも驚いたのかその場を離れようと体を動かす。

「あつーコラー!動かないでつてば!!」

なんとか宥めて手綱を握り直すが、そうこうしているあいだにも音は鳴り響き続けている。最初こそ驚いたが原因は見当がつく

(アイツだ…)

十中八九商人の仕業で間違いないだろう。此方は散々頭を悩ませているのに奴は変わらず平常運転だ、そう考えるとなんか腹が立ってきた。

(決めた!)

旅立つ前に文句を言つてやる、ついでに何か役立つものがあるかもしれない。幸い見回りの時に貯めた小遣いがそれなりにあるし備えて置くのもいいだろう。

そうと決めると話は早い、早速エリーは音の発生源に向かって歩き出した。

「……………ええ〜?」

エリーは目の前の光景が信じられなかった、ここは間違いなくジャクソンにあった廃ホテルだ。それがどうだなんか物すごい事になっている。

「光ってる…」

そう、ものすごい光ってるのだ。ネオン輝く夜の街の如き光を放ち"安心と信頼"と書かれている旗が建物に掲げられている。ボロボロだった見た目も完璧に直されている。ホテルだけでなく周りにあった店も同じく電飾が取り付けられ旗を掲げている。

「ホント、なんなのもう!!アイツどこに居るの「ヒツヒツヒツ、お呼びかなあストレンジャーガール。」わあー!!」

振り向くと後ろに奴がいた。

「ヒツヒツヒツ、随分と御立腹だがどうした？カルシウム不足ならサプリメントがあるぞ。それとも月一のやつか？痛み止めならあるがあまりオススメは出来ないな。」

「違うつうの!!イラついてるのはこの馬鹿でかい音のせい!!何やってんのあんたら!!」

失礼な勘違いを正しながらキレて質問をする器用なエリー

「ああ、これか？なんて事ないただ地面を爆破してるだけだ。」

「何やってんの!?!土砂崩れが起きたらどうすんの!!」

「大丈夫だ、商人をやる前は洞窟内でダイナマイトを使ったりしてたからな、危険な場所とそうでない場所の判断はつく、この辺りなら大丈夫だ。」

自信満々に商人は言う

「嬢ちゃんこそどうしたこんな朝早くから馬なんぞ連れて、家出か？」

「…べつに関係ないでしょ…」

凶星をつかれ顔を背けるエリー。

「ヒツヒツヒツ、まあそうだなそれで買い物か？何か必要なら入ると良い新装開店後初めての客だ。」

そう言つてホテルに入っていく商人、エリーもムスツとした表情をしながらも後をついて行つた。

「ウエルカム!!」

歓迎の言葉を聴きながらエリーは店の内装をみる、外も凄いが内部も凄い、明らかにパンデミック前の状態を取り戻している。

「これ、あんた達だけでやったの？本当に？」

「ヒツヒツヒツ、そんなわけないだろうちやんと人手は確保して、手伝わせた流石に3週間じゃ完璧とはいかないが、商売するには問題ないだろう?..」

「まだ完璧じゃないんだこれで？」

「まあなそれでご注文は？」



「…とりあえず長旅に使えそうな物見繕って、その中から買えそうな物だけ買うから。」

エリーが言うのと商人が首を傾げる。

「旅？家出じゃないのか？ストレンジャーガール？」

「違うよ、これからソルト・レークに行くんだよ。そのために必要なものを揃えたいの。」

「そうか、しかしソルト・レークか…嫌なことを思い出すな…」

商人が布で隠している顔を歪め呟く

「何、ソルト・レークで何かあったの？」

「ああ、ファイヤフライ奴らに物資を奪われた時があつてな、その時仲間の何人かが頭を吹っ飛ばされた。」

「えっ？」

それを聞いたエリーは思わず目を見開く

「以前ソルト・レークで商売をしようとしてな、ファイヤフライの奴らに声をかけたら、それを寄越せと銃を突きつけられてな、断ったら問答無用でズドンだ。」

商人の話に黙って耳を傾けるエリー

「ムカついたから奴らの本拠地に向かって音響爆弾を投げ込んで感染者を仕向けてやった。他にもやばい匂いのする缶詰を建物内に投げ込んだり、まあ色々やってな、とにかくそれ以来ファイヤフライはブラックリストに乗せて商売をしない事にしたんだ。」

「何やってんの？」

仕返しにしては余りに幼稚な手段にエリーは呆れる、仮にも仲間がやられたと言うのにそれで良いのかと…

「だが、もうブラックリストからファイヤフライの名前は消してある。」

「へえ、なんで？」

「組織が壊滅したからだ。」

その言葉にエリーは身を乗り出す

「どう言うこと!?!ファイヤフライが壊滅した!?!」

「ああ。」

「何で!？」

「だいぶ前にアイツらの残党にあつてな、これまでの非礼は詫びるだからこれを買取って商品売って欲しいと言われたんだ。確かワクチンかなにかの研究資料だったかな？」

「それ見せて!!」

それを聞いたエリーは商人に詰め寄る。

「おいおい、どうした買い物は良いのか？そもそも何でそんなもの見たがる？」

「いいから見せて!!お金なら払うから!!」

そう言つてエリーは受付のデスクの上に全財産をおく。

「はあ…わかつたよストレンジャーガール、全く最初の商売がこれとは…」

商人はぼやきながら奥へと向かつて行く、暫くして紙の束を持ってきた。

「エリー!!ここに居たのか!?捜したんだぞ!!」

しばらくしてジョエルがやってきた、エリーがいないことに気づいて急いできたのか服装がかなり乱れている。エリーの姿を確認すると抱き締める。

「急にいなくなって心配したんだ「やめて!!」!？」

自身を抱き締めているジョエルを突き放しエリーは言う

「全部知ってるんだよ!?!ワクチンを作るにはアタシが死ぬ必要があつたことも!それを許せないからファイヤフライを潰してアタシを連れ出したことも、」

それを聞いたジョエルは動揺する。

「エリーお前どうして?」

何故それを知っているのかを問う。

「商人がファイヤフライの生き残りから研究資料を買取ってたんだよ!そこには研究のこと以外にもジョエルがやった事についても

書かれてた!!みんなを助けられたのに!!アタシは生きた証を残せたの!!何で助けたの!!」

そう言われてジョエルは顔を伏せる

「ねえなんとか言つてよ!?ジョエ「すまないストレッチャー少し良いか?」ツツ邪魔しないでよ!!」

空気を読まず急に入ってきた商人に怒鳴るエリー

「いやその治療薬のことだがな?」

しかし商人は冷静にだがどこか言いにくそうに話す

「もう作つたぞ試作段階だが…」

その発言で空気が凍った

## 8話

ワクチンを開発したといった後の2人の反応は凄かった、商人が圧倒される程。

作ってたて何だ!、自分以外にも免疫を持つものがいたのか!、まさか生きたまま解剖したのか!、など質問攻めにされ、取り敢えず2人を一旦店の中に入れた。

「ほら飲め茶だ、これ飲んで落ち着け。」

店の中にあるソファに座っている2人にお茶をだす、そして自分も対面に座り説明する。

「先ず始めに言つて置くが俺たちは人を生きたまま解剖なんぞしてない、前提としてそれだけは言っておく。」

その言葉に2人は頷く

「解剖したのはあくまで感染者だけだ、ランナーやらクリツカーやらな、普通の人間に関しては死体だけしか調べてない」

「ならどうやってワクチンを開発したんだ?」

ジョエルが商人に対して質問する、自分はファイヤフライを潰してエリーを助け出した。しかしエリーを犠牲にすることがワクチンを作る唯一の方法だったのは理解している。その情報が嘘であったとは思えない…

「誰もそんなこと頼んでないけどね…」

ジョエルの言葉にエリーが呟く、言葉に覇気がないのはワクチンが開発されたのを知って怒りの矛先を失ったからか…

そんな様子のエリーに何か声をかけようとするも言葉に詰まる、今の自分が何を言ったところで彼女には届かないだろう。その無力感を誤魔化すためにカップを手に取り茶を流し込む。

「話を続けるぞ、その資料に書いてあることは間違いではない、だがそれが全てと言うわけでもないと言うのがウチの医療チームの意見だ。」

「どういいうことだ?」

「その資料にはそのの嬢ちゃんに感染した菌は変異していると書かれてたな、そして脳に同化してると？成る程俺は詳しく読んでなかったからわからなかったがそこからワクチンを作るとなると確かに嬢ちゃんは死ぬ必要がある。なら話は簡単だ、そんな菌使わなければ良い。」

エリーがその言葉に反応して商人をみる。

「何言ってるの？そんなことできるわけないじゃん、ワクチンを作るには私の中の変異した菌が絶対に必要、その前提だけは変えられないって書いてあるじゃん」

商人にエリーが反論すると彼はテーブルに置かれている物を指さす。

「その茶、一体何の茶だと思う？」

「？」

2人は商人のことばに首を傾げる

「この茶がなんだって言うんだ？」 「そうだよ、勿体ぶらないで早く答えてよ。」

「キノコ茶って言うんだそれは。」

言葉の意図を理解出来ずに黙っていたが、段々と顔が険しくなっていくまさか此れは…

「奴らのキノコ茶だ。」

次の瞬間エリーは立ち上がり商人を殴り飛ばす。

「なんて事してるのアンタ!!そんなことしてツツ!!しかもジョエルはさつき!!」

あまりの怒りに言葉が上手く纏まらず、商人の胸ぐらを掴み続ける。しかしジョエルが先程出されたお茶を飲んでしまったのを思い出し慌て出す。

「落ち着けストレンジャーガール、言っただろうワクチンがあると…」

「だからなんなの!!それと此れと一体何の関係が「それだ。」え?」

「それがワクチンだ。ストレンジャーガール。」

「経口摂取することで体内に入った菌を無毒化し無害なものにする

それがその茶の効果だ、まああくまで咬まれたり菌を吸い込んだ時に飲んで無毒化するだけで永遠に感染しなくなるわけじゃないから試作品なんだが。」

その言葉にエリーは掴んでいた手を離す

「アイツらのキノコを食べると、菌を無毒化できる?」

「正確には、ある程度毒抜きをして茶にするとだな。勿論その他にも苗床を専用のものにして育てたり、育てる時に別の菌類と一緒にしたりと他にも色々やるが、とにかくそれで治療薬の効果を発揮する。」その言葉に今まで黙っていたジョエルが口を開く

「商人、治療薬が完成してたなら何故それを隠すんだ?それが有れば助かる命もあっただろう?」

少し責めるような口調でジョエルは話す、自分がこんなことを言う資格はないだろう、自分は世界よりもエリーを取ったのだから:だがそれでも言わなくてはならなかった、この男の真意を知るためにも:「ん?いやだいたい前から販売してるが?」

「はい?」

その言葉に2人同時に気の抜けた声が出る。

「もしかしてお前達カタログを見てないのか?初めてあった時にちゃんと配るだろう、その中の薬品一覧に書いてあった筈だぞ?」

その言葉聞いてジョエルは思い出す、そうだ、確かに初めてコイツらのところで買い物した時になんか渡された:アレはカタログだったのか。

「アタシそれ貰ってない」

「ああ、嬢ちゃんには渡して無いな、今度他の奴に見せてもらおうと良い。」

呆然としているジョエルを他所に、エリーが商人に言う。エリーに關してはジョエルがいた為配る必要はないと判断し、渡さなかったのだ。商人は悪いと思いきや今度からは常連と一緒に初めの客には渡そうと決めた。

そんな商人を見てジョエルは思う、この男は悪意があるわけではな

ただ根っからの商人なのだ。

「わかった今度確認しておくよ…今日はすまなかったな。」

「いや、いいって事よ常連との交流は大事だからな。それに良いアドバイスを貰った、ワクチンに関しては最初に説明するでしょう。」

「ああそうしてくれ。」

ジョエルは立ち上がりエリーと向き合う

「エリー…」

「っ…」

まだ少し気まずいのか顔を俯かせるエリー

「俺の為に怒ってくれてありがとうな。」

「別に…結局勘違いだった訳だし、」

そう言うときエリーは商人に頭を下げる

「ごめんなさい、勘違いしてアタシ思いつきり殴って本当にごめんなさい。」

「俺からも謝るすまなかった。」

頭を下げる2人に商人は何て事はないと笑う

「ヒツヒツヒツ、気にするな。昔はもつと理不尽な目にあつた事がある、こんなのは如何とも思わん、どうしても言うなら次に客としてきた時は奮発してくれ。」

「ああわかった、エリー。」

「うん…」

「帰ろう。」

「うん。」

そう言つて2人は店を出る、あの様子なら多少のしこりは残っているだろうが、まあ大丈夫だろう。

取り敢えず、エリーがめちやくちやにしたテーブルを片そうとした時だった。

店の奥にある無線から声が聞こえた。

『こちらシアトル支店長、ジャクソン支店長応答せよ』

## 9話 side シアトル

〜3年前〜 シアトル

「おい早く来いよ！置いてくぞ!!」

「待っててば!!」

1組の男女が廃墟となった街を歩いていくまだ子供といえる年齢だが、動きに無駄がなく身につけている装備などからして訓練されている事がわかる。

「本当にいるの？アイツらが？此処は感染者達だけじゃないwlf やスカーだつて居るのに？」

「嘘じゃないさ！間違いない！ファイヤフライにいた時に見た奴らと同じ格好だった!!この街にも居るんだよ!!」

「オーウエン…」

オーウエンと呼ばれた男の方が興奮しながら、後ろをついてくる女にまくし立てる。それをみて女はため息をつき話す。

「忘れたの？私たちはアイツらと敵対してたんだよ？顔を覚えられてるかも知れないし、もし気づかれなくてもお金がないんだから買い物何てできないよ。」

そう言われたオーウエンはニヤリと笑い懐に手を忍ばせる。手を出すとそこには財布が握られていた、中身が入っているのかパンパンに膨らんでいる。

「アンタそれ…」

「実はな、ファイヤフライにいた頃からこつそり通ってたんだよ、勿論ファイヤフライだとは気付かれないようにしてな！」

「あつきれた…」

自身の偉業を自慢するように財布を見せつけるオーウエン

「そう言う訳だ!!金の心配なら必要ない！そんなに高くない物なら奢ってやるぞアビー！」

しかしその言葉を聴いてもアビーと呼ばれた女は渋い顔をしたまままだ。



「お金があるのはわかったけど、それならまずアイツらのことをアイザックに伝えないと、今の私たちはWulfに所属してるんだから。」

「わかってないな〜」

ムカつく笑みをオーウエンは浮かべる、それにアビーはイラついた。

「何がよー私たちのボスにアイツらのことを報告する！間違ったこととは言っていないでしょう!？」

「その結果、ファイヤフライの時のように敵対するかもな？」

その言葉にアビーは黙る。

自分達がいたファイヤフライと商人達は敵対関係にあった：理由は単純で物資を奪う為に彼らを撃つたのだ。

その後ファイヤフライは彼らに襲撃を食らった。敷地内に感染者達を呼び込んだり、どうやったのかは知らないが真夜中に建物内に侵入して大音量で黒板を引つ掻くような不協和音を流してきたり、兵や研究者達の部屋にとんでもない匂いのブツを投げ込むなど…

死者こそ出ていないが思い出すだけで腹立たしい、アレのせいで建物内の全員が寝不足になったし、自分の部屋からは数ヶ月も匂いが取れなかった。

まあしかし確かにあの一件に関してはこちら側が悪い、あの後商人達を殺害した兵達は厳罰に処された。

「確かに彼らの物資を確保できればこれからの戦いに有利だ。でもWulfが彼らと敵対してみろ？彼らは間違いなく敵対勢力を支援しだすぞ？アイザックは悪人じゃないが、アイツらをそのままにしておく程御人好しでもない。ここは何も伝ええない事が正解なんだ。」

その言葉にアビーは納得する。

「…わかったよ…それで？アイツらはどこに居るの？」

その質問にオーウエンはああ、と答える。

「水族館だよ、海辺の近くなのな！」

「ヒツヒツヒツ、よく来たなストレンジャー！おっ今日はガールフ

レンドも一緒か？」

いた、本当にしかも何か着ている服が水族館に合わせたデザインになっっている

「ああ、コイツはアビーだ、アビーコイツがここの商人だ。」

「どうも…」

「ヒツヒツヒツ、ああはじめましてストレンジャー、さあ早速だが商売と行こう何を買う？」

挨拶もそうそうに切り上げビジネスの話に変える。

「そうだな、じゃあ何か美味しいものが食いたいな、何か出してくれよ。」

「ヒツヒツヒツ、まいどあり。」

その言葉を聞いたアビーが驚いた表情を浮かべる

「何？……って料理も出してるの？ていうか、アンタ達料理できるの？」

「ヒツヒツヒツ、まあな、以前暇を持て余してる時に色々なことに出してみてな、その内の一つが料理だ。自慢じゃないが中々美味しいぞ。」

商人は調理器具を取り出した、どうやら此処で作るらしい。

「見学科は無料だ、存分に目でも味わうと良い」

言うか早いか早速作り出す、テーブルの上に置いたまな板に肉を乗せてミンチする。そしてミンチ肉に塩胡椒で味付けをして捏ねる、丸めて両手を使ってお手玉のようにして空気を抜いていき、フライパンが置かれたコンロに油を引いてふたつの肉の塊を焼く、用意しておいたパンに新鮮なトマトとレタス、そして焼き上がった肉の塊ハンバーグを乗せてチーズも乗せる。最後にもう一つのパンで挟めば…

「ヒツヒツヒツ、待たせたなチーズバーガー二つだ。」

それを見て2人は喉を鳴らす、いつも味気ない食事、栄養のみを重視しているものばかりだった為久々のご馳走の登場に2人は飢えた肉食獣のような状態だ。

一気に2人は齧り付く、噛めば噛む程味がして涙目になってきた。あつと言う間に料理を平げ、満ち足りた顔をする。

「なっ、来てよかったろ？」

オーウェンの言葉に

「そうだね。」

アビーは同意した。

「じゃあな商人またくるよ。」

「ああ、それじゃあなストレンジャー、そっちの嬢ちゃんもまたな。」

「うん、ありがとう、美味しかったよ。ごちそうさま。」

そう言うと2人は店を出て行った。

## 10話

「ふう…やれやれまさかファイヤフライのガキンチョ共が来るとはな。」

そう言うのと商人は近くに置いてある椅子に腰掛ける。商人は気づいていた。あの2人がファイヤフライの生き残りである事を…

（しっかし何でこんな所に来たんだ？わざわざこんな激戦区にこなくて、もつと安全な場所何ていくらでも有るだろうに？）

此処シアトルではセラファイトと呼ばれる宗教組織とWLFと呼ばれる武装組織が過去何度も対立し合っている。その為此処を訪れる者は大抵その二つの組織のどちらかの手にかかり命を落とす事になる。安全性を求めるならこのシアトルは落第点だろう…

（あの服装を見るに奴等はWLFに所属しているようだが…セラファイトに身内でも殺されたのか？）

安全な場所を求めて旅をした時にセラファイトに家族を殺された、その仇を討つためにWLFにと言う理由なら成る程納得できる。セラファイトは自分達の教えに反する者達を異端者として処刑するなどしている。憎まれる相手には困らないだろう…

「まあ俺が気にすることでもないか…」

どうも自分は色々と考えてしまう、他の仲間達からお前は考えすぎだとよく言われていた。ロス・イルミナドスに反旗を翻す時も自分だけは最後まで決めかねていた。決心がついたのはあのエージェントを間近で観た時だ、具体的に言うところの罠から難なく生還した時。

「さてと…行くとするか。」

商人は立ち上がり水族館の奥へと向かう、すると中には同じ格好をした者達が数人待機している。

「俺はこれから島に向かう、コッチは任せたぞ。」

「了解です、支店長。」

その内の一人に店を任せて外にある船着き場に止めてある小型船に乗る。元々はイルカショーの劇場に停めてあったものだが、ある理

由から外に出している。支店長は船のエンジンを起動して島へと向かった。

それから10分程で船は到着する、船を停めると人が集まってくる、セラフアイトの人間たちだ。

「どうぞ、よくぞおいで下さいました、さあさあ預言者様がお待ちです」

その内の一人が人の良い笑みを浮かべて此方に近づいてくる、支店長はそれに取り合う事もなくただ黙って島を歩く。

しばらくすると村が見えてきた、木造の家に野菜畑、果物の木や家畜小屋など、現代的な物を排除した昔ながらの生活といった感じの暮らした。

その中でも一際凝った造りの家に入っていく、すると中には女がいた。その女を視て支店長は言う。

「よお、久しぶりだな預言者様？元気だったか？」

その言葉を聞いた女性は優しく微笑んだ。

## 11話

「とりあえず頼まれた物を用意したぜ、調味料に斧や鉋、弾薬に新しい果物種だ。」

「ありがとうございます、アウトサイダー。」

品物を預言者の前に商人は並べていく。

「此方も頼まれていた物を用意できました。ヤーラ例のものを…」  
声をかけられた女性が商人の前に大量の草の束を並べる。

「取り引き成立だな。」

「ええ…」

お互いが目の前にあつた品を受け取る。

「それじゃあ、次の仕事を始めようか…」

「わかりました、お願いします。」

そう言うのと商人は預言者に近づくと懐から3種の植物を取り出す、それをすり鉢を使ってすり潰していく、さらに何かしらの液体を加えて混ぜそれを家の中にある鍋に入れ一煮立ちさせる、その中身を飲料用の容器に移し預言者に差し出す。

「出来たぞ…」

「はい…」

商人に礼を言つて飲み物を受け取る預言者、ゆっくりとその中身を飲み干していく。

「薬は7日分ある、朝夜と二回に分けて飲め、また一週間後作りにくる。」

「わかりました、ありがとうございます…」

弱々しい声で自分に礼を言う預言者

「なあアンタわかってるだろう？このままだと本当に死ぬぞ？」

商人の言葉に預言者は何も言わない

「今からでも遅くない、まともな治療を受けるべきだ。こんな民間療法で出来る事なんざたかが知れてる、いくらこの薬草が優れていようが限度がある。」

預言者は何も言わない

「昔の医療で治すのが駄目か？戦士と呼ばれる奴等は現代的な武器を使っているだろう？ならアンタだって例外があったて良い筈だ、何だったら俺が無理矢理治療したと言う体にしても良い。」

ただ黙って商人を見る

「アンタらにはこのハーブや薬の材料を作ってもらってる、そのま  
とめ役のアンタには長生きしてもらえると助かるんだが？」

言葉を語り尽くした商人に預言者は首を横に振る

「…そうかい…」

預言者の答えを聞いた商人一言呟き席を立って外へ出る…

「貴方は…」

外へ出る瞬間、背中を向けた商人に対して声を掛ける。

「貴方は優しい人ですね…」

商人は何も答えずそのまま去っていった。

外に出るとセラファイトの信者達が挨拶してくる。

今でこそ歓迎されているが、ファーストコンタクトは散々だった…  
数年前初めてこの島に商売に来た時は初対面で吊るされかけた、そ  
こを預言者が信者達を宥め、ことを収めた。

その後預言者の体調が思わしくないとの話を聴き自分が彼女の治  
療を行った。

勿論セラファイトの教義に反する事がないように医療機器などに  
は頼らない方法で…

それ以来自分はセラファイト達から信頼を得て彼らと交易を行う  
ようになった。彼らにグリーンハーブなどの薬草を育てさせ此方か  
らは武器や食料を提供するまさに理想的な関係を築けた、だが…

(預言者の体調は日々悪化している、このままでは時間の問題だ…)  
元々いつ死んでもおかしく無かった身体だ、稀少な薬草を使ってい  
るとはいえそろそろ限界がくるだろう。

そこでふと考える、自分は何故こんなに彼女を気にかけているのか

？

たしかに彼女が死ねば彼らを束ねるリーダーは居なくなる、だがそれだけだ。

彼女が死んでも新しいリーダーが出てくるだけで、取り引きは継続していくだろう…何も問題はない。

(強いて言うなら信者達の暴走が加速するくらいか…)

預言者が生きている今でも勝手にWLFや旅人を襲う馬鹿がいる。

これで預言者が死ねば更に馬鹿共の暴走は止まらなくなるだろう…

(成る程だからか…)

彼女を気にかけていた理由はそれだと納得する。

そうして彼は島を後にした、自分が本当は何を感じていたか気付かないまま…



## 12話

島から帰った後船着き場に船を止め自分の代わりに店を任せていた従業員達と情報交換をする、どうやらあの後客は来なかったようで特に変わった事は起こらなかったらしい。自分も島での事を報告した後手に入れた薬草の束を保管して少し休んだらまた店にでる。

それからしばらくは特に変わった事のない日々が続いた、アビーやオーウエンが買物に来たり、2人以外のファイヤフライの生き残りの仲間がオーウエンに案内され店に来たり、また島に取り引きや治療の為に赴いたりなど…

半年後、銃を構えた奴らが店に来た。

「お前達が例の商人達か？」

連中を率いているであろう男が威圧的に聞いてくる。

「ヒツヒツヒツ、例のかどうかは知らんが確かに俺たちは商人だ、そう言うお前達はWLFか？」

「ああ…」

「やっぱりか、で何のようだ？」

「ウチのボスが会いたがっている、大人しく着いてきてくれると助かるんだが？」

その言葉に商人は笑いながら答える。

「商売の話か？なら大歓迎だ、だがそうじゃないなら遠慮願うな。碌な話が出来そうにない。」

「…お前ふざけてるのか？」

言葉に怒気を込めて男は銃を構える。それを見ても商人は動じずに話す

「ふざけてるのはお前達だ、ここは物を買う所で俺たちは商人だ、それ以外のことをするつもりはない常連客に対しては多少のサービスはするがいきなり銃を突きつけてくるような奴等の拠点に出張する

ような事は御免だ。」

「この野郎ふざけるんじゃない!! 「おい待ってくれ!!」」

商人の言動に限界が来た兵士の一人かトリガーに指を掛けそうになった所を誰かが割って入るオーウエンだ。

「すまない商人俺たちは客だ、お前たちと取り引きをしたいんだが直接会った方が色々と手間が省ける、だからウチに来て欲しいんだ。」慌てた様子で商人とWLFの間立つ、それはそうだこんな事をしてもしも敵対関係にでもなってみろ。何をされるか身に染みている…

「…わかったよ、ただ行くのは俺一人だ他の奴らは店番として残していく。」

「ああわかった、すまないな急に。」

そう言うと商人は荷物を背負い外に出る、外にはWLFの車が数台待機しておりその内の一台に商人は乗り込む、オーウエンも一緒だ。

「狭いな…」

「イヤそれはアンタの荷物の所為だろう、何をもってきたんだ?」

「商売に必要なものさ、ついでに今日の昼飯が入ってる。」

商人は荷物の中から何かを取り出す車内に香ばしい匂いが充満し、兵士達の喉が鳴る。ガリリッククチキンのサンドイッチだ。

サンドイッチに齧り付きこれ見よがしに美味そうに食べる、急に銃を突きつけてきたのだ、これぐらいの嫌がらせは許されるだろう。

商人のささやかな復讐だった

## 13話

そこは商人の目から見ても新鮮な光景だった。大勢の人間達が集まっているのは珍しくはない、ただこう言った武装組織は今までの経験から大抵まともな統率を取れていないところが多かった。FED RAのように武器をちらつかせ弱者を支配するかハンターのように根こそぎ奪って行くか、大抵はそのどちらかだった。だがWLFは：「凄いな…」

商人は素直に感心していた。これ程の人員、これ程の規模の組織を目立った反発を起ささせずスタジアムを利用して農業や畜産を行わせている。

(プラーガで支配してる訳でもないのに大したもんだ。)

この組織のボスであるアイザックと言う男はかなりの者だと認識した、それと同時に警戒もする。

(俺をここに呼んだ理由はなんだ?)

ただ商売をしたいと言う訳ではないだろう、その程度の事ならこんな嚴重に自分を連れてくるはずは無い。

(セラファイトと取り引きしている事か?)

可能性としては一番高いだろう。どちらにしろ警戒しておいた方がいい：「着いたぞ。」

商人を案内していたオーウエンが言う。どうやら考え事をしている間に目的の場所に着いたようだ：

「この部屋にアイザックがいる、他にも俺を含めて数人の兵士がいるが取り引きの邪魔はしない。」

「そうか、ついでに銃で脅しをかけたらしなくてくれたら最高だね？」

商人は皮肉気に笑う、どうやら先程の出来事を根に持つてゐらしい、その様子オーウエンは内心焦りながらも穏やかな口調で話す。

「大丈夫だ、部屋の中には俺だけじゃない、アビーやマニーもいる、何かあっても絶対に手は出させない、約束する。」

「ほう、マニーがいるのか？それは良い、楽しい取り引きになりそうだな。」

マニーとはオーウェン達と同じファイヤフライの生き残りである、メキシコに近い場所で生まれたため商人達の母国語であるスペイン語が話せる男だ。

余談だがマニーは自身の身内以外、商人は自身の仲間達以外初のスペイン語を話せる相手と言うことからものすごく気が合い一緒に酒盛りをするほど意気投合していた。

「よし、じゃあ入るぞ？」

「ヒツヒツヒツ、了解。」

中に入ると其処には男がいた、鋭い眼付きに屈強な肉体、色黒な肌には遠目ではわからない程度の傷が幾つもあり歴戦の戦士間を感じさせる。

「アンタか、水族館で商売をしてる商人てのは…」

「ああ、アンタがアイザックか？」

お互いが相手を観察し合う中、自己紹介も済ませ早々に本題に入る。

「さて、商売を始めるとしよう、必要なものはなんだ？取り敢えず食料や弾薬医療品辺りは当然として兵士達に必要なのは嗜好品だろうな、タバコや酒、なんなら菓子類もあるが何にする？」

商人の言葉にアイザックは静かに口を開く。

「ワクチン…」

「ん？」

「試作品のワクチンについて聞きたい。」

## 14話

「試作品のワクチン…?」

「何のこと?」

アイザックの言葉に困惑するアビー達を他所に商人は質問に答える

「ワクチンについて聞きたいってそれについて知ってるってことはカタログはもう読んだんだろう? なら其処に記載してあるとおりで。」

「つまり、虚偽でなく本当に開発したと言う事か?」

「ああ。」

それを聞いたアイザックは座っていた椅子から立ち上がり商人に言う

「我々と取り引きして欲しい、ワクチンは勿論さっきアンタが言っていた弾薬や医療品等全てだ…支払いは貴金属でも良いか?」

「ヒツヒツヒツ、ああ構わないぜ、毎度あり。」

「ちよつと待って!」

取り引き成立、話はこれで終わりだとばかりに去って行こうとした商人をアビーが引き止める。

「何だ?」

「何じゃないでしょ! ワクチンって何!? 説明してよ!!」

「感染者達を生み出した菌に対するワクチンだ。」

「…えっ」

アビーは言葉を失う、いやアビーだけでなくオーウェンやマニーも同様の反応をした。

「以前俺達の仲間がファイヤフライの生き残りからワクチンの研究資料を買い取ってな、ウチの医療チームがそれを引き継いで、その結果完成したのがこのワクチンだ。」

「ちよつ、ちよつと待って!!」

一足先に冷静さのある程度取り戻したオーウェンが訪ねる

「ファイヤフライの研究を引き継いだって言ったな？てことは免疫を持っていてるやつを見つけたって事か!？」

「おいストレンジャー、慌て過ぎて自分の前の所属先をバラしちまってるぞ?。」

「あつ!!」

商人の指摘を受けて手で口を押さえるオーウェン、それみた商人はため息を吐きながら

「心配しなくても、お前たちに復讐しようなんざ考えてない、危険と隣り合わせの職業だからな。撃たれた奴等も覚悟の上だっただろうしな…」

商人が言うのと元ファイヤフライ組は複雑そうな顔をする。

「話を戻すぞ、例の免疫を持っていてる少女の事だが、俺達は彼女を解剖なんぞしてない、別の方法であのワクチンは開発した。」

「そんなのあり得ない!!」

商人の言葉にアビーが声を上げる

「ワクチンを開発するには免疫保有者が必要不可欠!!父さんはそう言ってなんだ!!それ以外の方法なんてなかった!!だから父さんは…!!」

「父さんつてもしかしてアンダーソン博士の事か?」

「ああそうだ、ジェリー・アンダーソン、アビーの父親だ。」

オーウェンがアビーの代わりに答える

「そうか、まあ別に嬢ちゃんの父親が間違ってた訳じゃない、俺達だから別の方法が見つけれただけでその時点では唯一の手段だったんだろう。」

「そのお前たちだけと言うのは?」

アイザックが聞くと商人は一言

「企業秘密だ。」

そう言って話を終わらせた。

あれから商売についての取り引き内容を確認し契約書を作成して  
拠点へと戻って来た。

「疲れたな…」

流石に今回は肉体的にも精神的にも疲労が蓄積し過ぎた。

横になって早々に休もう、そうしてベッドのある部屋に移動しよう  
とした時、

「ガアアアアー!!」

何かの音が聞こえて来た。

## 15話

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

立て続けに聴こえてくる何かの叫び声、明らかに危険な存在だと確信させるその声の主は直ぐ近くにいる、しかし

「……ハア……」

商人は気だるそうにベッドから立ち上がり水族館の外：ではなく

「まったく……」

内部へと進んでいく、しかも慌てる事なく慣れていと言わんばかりに、しばらくすると奥に扉が見えてきた。

「グウウウウウ!!」

叫び声の音源はその扉の先にあるようだ、しかし商人は迷わずその扉を開く。

「……………」

扉の先には何やら広い空間があった、その中心には海へと通じるプール、そしてそれを覆い囲むように無数の椅子が置いてある。

そう、ここはイルカやアシカなどのショーを行う劇場だ。

「クソが……」

商人は唐突に悪態をつく、その視線はプールの方へと向けられている。よく見るとプールの中心には浮島のようなものが作られている、おそらく商人達が作ったのだろう……

しかしそんなことはどうでもいい事だろう……何故なら

「ガアアアアアアア!!」

浮島には声の発生源たる怪物が雄叫びを上げ商人を睨んでいるのだから……

その怪物は普通ではなかった、通常の感染者達とは違いキノコのような菌が生えてこそいるが、黒い何かに侵食され尚且つ、身体が菌に覆い尽くされていると言うのに確実にこちらを視認している。

しかし商人は焦らず銃を構える。それもそのはずだ、何故ならこの



怪物は商人達がワクチン開発用に育てている苗床なのだから。

本来なら決められた時間に鎮静剤を打ち込んでおとなしくさせているのだが

「誰だ？今日の投薬係は？コイツ大分前からこの状態だったろう？」

今日に限って誰かが投薬をし忘れてたらしい。

「こっちは疲れてるってのにふざけるなよ…」

だいぶキレた声でつぶやいた商人は決心する、今日投薬を忘れた奴はWLFを担当してもらおうと、シアトルで一二を争う面倒な場所であろう所を担当させてやると…

「ガアアアア!!」

「おっとー!」

いきなり猛スピードで迫ってくる怪物をかわして銃を構え直す。

どうやら浮島から跳躍して自分目掛けて体当たりしてきたらしい

…

ドンツツツ!!と凄まじい爆音が響き渡る。見ると自分がかわした事によって壁に激突した怪物が瓦礫の下から出てきたようだ。激突した影響かフラフラしている、チャンスだ。

「俺も早く寝たいんでな、お前もとつとと眠れ。」

そう言うのと商人は銃を怪物に向け引金を引く、発射されたのは弾丸…ではなく注射器だった。

トス

「アツ、カツカツカ」

ドサツ!

注射器が頭に刺さり薬が注入されるとそのまま倒れる怪物。どうやら息を引きとったらしい…

「ハア、死んじまったか…良いとこまで行ってたんだがな…」

そう言うのと商人はナイフを取り出し菌を肉ごと切り落としケースに入れる。

「まあこれぐらいで良いか…またどこかで適当な感染者を捕まえないくちな。」

そう言つて商人は死体をバーナーで焼いて処分するとすぐに身体を消毒しに行く。水族館内にあつたシャワーを修理しておいて良かったと心から思った。

その後商人はすぐ自室に戻つて眠りにつく、今日は本当に疲れた：商人として充実した日々を送りたいと思つていたがこれはなんか違う：

そう思う商人だった。

## 16話

ある日の夕方、商人が武器の手入れを行っていると誰かがやってきた

「ヒツヒツヒツ、よく来たなストレンジャ…何だマニーか…」

「buena noche 商人、何だとはなんだ。」

来訪者がマニーだと解ると接客用の態度から一転して素に戻る商人

「今日は何しに来たんだ？酒盛りなら今度にしてくれ俺は今忙しい…」

「違う違う、今日は情報を売りにきたんだ、とっておきの奴をな…」

「そうかそれはすごいな、出口は入って来た所だ、気をつけて帰れよ。」

「なんでだよ!？」

まったくと言って良い程信じていない商人にツッコむマニー。

「何でじゃないだろう、情報なんて言ってもどうせ良い女がいるとかくだらないもんだだろうが…」

そう言って武器の手入れ作業に戻る商人、実は以前にもマニーから情報を売りにきたと言われ話を聞いてみた事があったのだが、やれ良い女を見つけただのやれポルノが大量にあるであろう建物の情報だの正直言っても良いものばかりだった…

マニーの事は嫌いではないが自分が心惹かれる情報を買りに来たとは思えない、仕事の邪魔なので今日の所は帰ってもらおうとしたのだが。

「いやいや違うって、ちゃんとした情報を持ってきたんだよ!」

「ハッ!」

「鼻で笑いやがったな?!良いから聞けって!WLFの管理してる場所に病院があるんだがそこにシアトル最初の感染者がいるかも知れないんだよ!」

「…何?」

マニーの言葉に武器の手入れをやめ、目を向ける。

「俺やオーウェン達が元ファイヤフライだって事は知ってるよな？お前らがワクチンを作成してるって話をしたらその中のノラって奴がお前にこの事を伝えてくれって頼まれたんだよ、ワクチンの完成に役立つんじゃないか？ってな。」

「フム…」

その情報に商人は考える、最初の感染者…つまりここシアトルでのパンデミックの原因がいると言う事だ。

通常感染者達は時間が経つと壁や地面と一体化し完全にキノコ化してしまうコロナーと呼ばれる状態になる…

だがそうならずパンデミック時から生きている感染者がいるのであればその体を調べれば何か解るかも知れない。

「わかった、その情報を買収しよう。詳しい場所は地図に書いてくれ、準備が出来次第そこに向かおう。」

「了解だ。毎度あり。」

そう言うとマニーは地図を取り出して病院がある場所に印をつける。

商人は金が入った袋を取り出してマニーに渡し地図を受け取った。

「病院にはウチの兵士達が待機してるからな、お前たちが通してもらえるように話しておくよ。」

「ああ、よろしく頼む。」

「じゃあ、またな商人。」

マニーが外に出るのを見送り姿が見えなくなると商人は武器の手入れを再開する。

「しかし最初の感染者か…」

もし生きていたら厄介な事になりそうだな…そんな事を考えながら対策を練ることにした。

## 17話

「ハア、ようやく見えてきたな…」

瓦礫の山や激流の水路を超えやっと病院にたどり着いたと溜め息をもらす。

感染者達やセラファイト達の妨害こそ無かったが、此処までの道は険し過ぎた。

こんな事ならw1fの連中に送ってもらえばよかったと後悔する。そんな事を考えていると病院の入り口にいたw1fの兵士が此方に気づく

「ん？…あつ！おい来たぞー！」

兵士が叫ぶと建物内から見知った顔の奴らが出てきた、元ファイヤフライ組だ、その中の一人が自分に近づいてくる。

「よく来てくれたね、歓迎するよ商人。」

「ああ、確かノラだったか？」

「ええ、よろしく、早速だけど本題に入って良いかしら？」

「ああ、頼む。」

挨拶もそこそこにして商人は仕事に集中する。

「マニーから聞いているとは思うけどこの病院こそが始まりよ、最初の感染者が運ばれてそれからはねずみ算式に増えていった。」

「まあ患者だけじゃなく医療スタッフたちも大勢居ただろうからな。」

加えて未知の胞子による怪物化、バイオハザードの条件としては最低に最高だ

「取り敢えずこの病院の当時の状況や感染者達に関する資料があるなら見せて貰えるか？それと地下室の見取り図も在れば良いんだが…」

「ええわかった、直ぐに持って来る」

「成る程、やはり当時の感染者達はまだまだかなりの数が生き残ったか…」

案内された部屋で院内にあった医療スタッフの資料や見取り図だけでなく、Wulfの調査記録にも目を通した商人、その中には感染者達についても報告されていた。

「ええ、この病院に潜伏していた感染者達の菌はかなり成長しているにも関わらずコロナーになっていない奴らが多かったのよ。まだ原型が残っている個体も服の残骸から推測してパンデミック直後の個体の可能性が高いと見てるわ。」

ノラの説明を聞いて商人は考え込んだ…

(パンデミック当時の奴らの多くが完全な菌にならず生き残っていた、つまりは例の感染個体も生存してるかもしれないと言う事か…)

これが自分達の世界なら商人はもつと警戒したかもしれない、この世界で店を構えてだいたい経つが彼らは無意識のうちにこの世界の感染者達に対する警戒度を下げてしまっていた。

ランナー、ストーカー、クリッカーという見つかったり音を立て無ければ問題が無い連中。

人間離れたした怪力を持つブローターやシアトル等の雨が多い地方でよく見かける酸性のガスを放出するシャンプラーと言った個体もいるがグレネードやアサルトライフル等の強力な武器があれば容易く排除可能な存在だ。

この世界は自分達の世界とは違う、同じような化け物になってしまふ様な病原菌の初感染者であれば流石にブローターを超える様な個体は出て来ることはないだろう。そう判断し商人はノラに向けて口を開く。

「よし取り敢えず、俺が地下に行つて様子を見に行く案内してくれストレンジャーガール。」

その発言にw i fの面子がどよめく。

「ちよ、ちよつと待ってよ!?!まさかアンタ一人で行く気なの!?!」

「ああ、そうだが?」

「そうだがって!」

ノラの質問に首を傾げながら答える商人、そこにオーウエンが声をかける

「商人俺たちも手伝うよ、お前達のおかげで俺達はこれまでに無いほど平和な時間を過ごせてるんだ。」

その恩義に報いたい、そうオーウエンが言うと周りにいた者達も頷く。

「アンタは父さんの研究を無駄にしないでくれた、それだけじゃなくアンタの仲間たちを殺した私達を許してくれた、だからお願いアンタ達を助けさせて。」

「ああ、それにお前らは良き隣人だからな、死んでほしく無い。」

アビーやマニーにw i fの兵がそうだ、そうだと同調する。

それを見た商人は目を見開く、それと同時に何か満たされていく感覚がする。

(ああ……これは……)

見開いた目を閉じ、しばらくしてゆっくり目を開く

「ヒツヒツヒツ、わかった、なら護衛を頼もう、報酬はここにいる奴ら全員に酒を一瓶振る舞おう。」

その一言で更にその場が活気付く。

「よしっ!!ならとつとと終わらせるぞ!ブローターだろうがシャンブラーだろうが片付けて飲むぞー!!」

「ああ!なんなら追加の酒も買って朝まで飲み明かそうぜ!!」

「ちよつと!!まだ仕事も終わって無い内に酒盛りの話しなんかしないですよ!!」

「それにアンタ達明日は仕事があるでしょう……」

オーウエンやマニーをアビーとノラが諫める、他の隊員達も良い酒が飲めると騒いでいた。

「まあ取り敢えず案内を頼む。」  
商人がノラに言うのと笑って頷き商人と歩き始める、w l f の隊員達  
も後に続く。

着いてきた大勢の隊員達を確認した商人はこう言った。

「いや、こんなには要らんぞ?」



## 18話

「よし、じゃあ準備は出来たな？」

病院の階段の前で商人は確認を取る。

「おそらく下は感染者共の巣窟になってる、幾らワクチンがあるとは言え咬まれば怪我をする、そして怪我をすれば当然出血する、感染は免れても出血多量が原因で死んじまったら笑い話にもならん：良いか絶対に油断するなよ。」

大量に着いてきたwifeの中からアビー、オーウエン、マニーの三人を同行者として指名した商人、

「ああ…まあ…うん。」

「出来たことはできたけど…」

「なんかなあ…」

「何だストレンジャーズ？何か気になる事でもあるのか？」

しかし彼等は全員顔を顰めて返答する、それに対して商人は首を傾げる。

それに対してアビーが口を開く。

「いやアンタが用意した装備なんだけどさ…除草剤って何よそれ、真面目に戦う気あるの？」

「当たり前だろうストレンジャー、菌の化け物である感染者共にとって有効な武器と言ったら此れだ。」

「いや…そうかも知れないけどせめて火炎放射器とかもう少しまともな武器を持ってた方が…」

「心配するな、それに俺は商人だ、変に強力な武器を使って誤射でもしたら目も当てられない、戦闘は本職に任せる、さてそろそろ行くでしょう。」

アビーの疑問に返答しながら商人はマスクを着用する、三人もため息を吐きながらマスク着けた。

「…ヒドイね…」

「まあ何年も放置されてた訳だからな…」

周りを警戒しつつも嫌悪感を隠しきれずに呟くアビーの独り言にオーウエンが言葉を返す、暗い院内は壁を埋め尽くす程の胞子が繁殖して、最早何処からが壁で何処からが胞子なのか判別できなかった。

パンデミック当初の状態から人の手が入っていない建物は何度も見てきたが、その中でも此処は群を抜いていた。

しかし…

「ヒツヒツヒツ、やはりな、電子機器の残骸や薬物が残ってる。使えそうな物をチエックして置こう。」

この人外は平常運転だった…所々を物色しながら使えそうだが運び出せない物はメモして書き留めている…

いくらなんでも緊張感が無さすぎるだろう、そう思ったのかマニーは少し咎める様に声を掛ける。

「オイ商人、あんまりウロチヨロするな…まだ何も出て来ちやいないがどんな化け物が潜んでるかわかったもんじゃ無い…」

「ヒツヒツヒツ、ああすまんすまん仕事に護衛がいる探索なんて中々ないからつい気が緩んでな、気をつけよう…」

「頼むぞ友よ、しかし最初の感染者か…もし生きてたらどんな化け物になってんだろうな？」

「ヒツヒ、そうだな…人体模型みたいな外見で四つん這いになって天井や壁に張り付いて襲ってくる様なやつだったり、身体中に目玉が

ついでに何回倒しても強くなって蘇る様な化け物じゃなければ良いな。」

「イヤに具体的だな!?いるのか!?そいつらは!？」

「ちよつとやめてよ!想像しちやつたじゃない!」

「…そんな奴らがいたら勝ち目無いぞ…」

「ヒツヒツヒツ、冗談だ…」

そんなやり取りをしながらも廊下を歩いていく四人…

「ねえ、ちよつと待つて…」

しかしアビーの声で三人は足を止める。

「どうした?ストレンジャーガール、トイレか?」

「ちがうわよ!!そこに何かいる!!」

前方のストレッチャーに繋がれた何かにアサルトライフルの銃口を向けるアビー、それと同時にオーウェンとマニーも銃を構える。だが…

「へい、ストレンジャーズ。そいつはもう死んでる…」

商人は三人を通り過ぎてそれに近づく

「体の原型は多少は残っているがコイツはもうコロニー化してる…ただの菌の塊だ…」

その言葉に多少警戒心が下がったのか三人は銃口をおろす。

「フウ…そうか…しっかしまだ感染者が一体も出て来ないが、もしかしたら全員コロニーになってるかも知れないな…」

「…まあ確かにこれだけ壁が菌だらけになってるから無くはないだろうけど…」

「だがそうなる最初の感染者もコロニーになってる可能性もあるな、そうなたら商人…ワクチンの「グオオオオオオ!!」っ!!」

ガツシャーンと何かの機材が倒れる音と共に何かの叫び声が聴こえ全員が音の聞こえた方へ顔を向ける、視線の先にあったのは壊れて使い物にならなくなった扉があった。

「グウウウウ!!」

しかし四人はすぐに別のものに目を向けた…

ドス！ドス！ドス！

それは塊だった…

肉と肉、菌と菌が混じり合い寄せ集まった巨大な塊…

「グオオオオオ！！！！」

咆哮と同時に其れは走り出した…

## 19話

失敗した…

全速力で走りながら商人は素直にそう思った。

「ゴオオオオオ!!!」

背後から破壊音と共に叫び声が聞こえて来る、脚はそんなに速くはない様だが捕まれば間違いなく助からない…

それは普通ではなかった…複数の感染者達が一人の感染者によって吸収され丸みを帯びた存在に複数の手足がある。

しかもそれは一つの生命体ではなかった…よく見ると癒着している感染者達は動いている。

吸収と言うより共生に近いかも知れない

「なんつっ！何なんだ!?あれは!!あんな物見た事ねえぞ!!」

横を走っているマニーが何か言っているが商人達は取り合う余裕はなかった。

陸上選手もかくや無駄のないフォームで全力ダッシュを行う商人とアビー達…

距離が開いた所で振り返りながら銃弾を喰らわしているが効果はみえない…

「クツツソ!!周りに張りついてる奴らのせいで中まで通らない!!」

「まあ明らかにストーカーやらクリツカーとかの厄介な個体ばかり張りついてるからな…生半可な武器じゃまず攻撃は通らんだろう。」

「言ってる場合!?攻撃したなら早く逃げるよ!!」

有効な攻撃手段がないと解ると再び走り出す四人、仲間達の待つ上の階に行きたい所だが、奴は間違いなく自分達を追って来る…そうしなければどうなるか。

見たこともない個体の出現↓思考停止↓捕食開始↓大惨事

それだけは絶対に避けなければならない。

だからこそ大して効果のない攻撃を時折当てながらやつを引きつけ、出口から離れた場所に遠ざけようとしていた…

「ウウウウオオオオ!!!」

「ハア…ハア…ハア…みんな無事？」

「オエ…何とか…」

「ハア…no hay problema、問題ないぜ。」

走り続け出口からある程度離れた所まで来て全員の安否確認を行うアビー。

「まったく！何々だよあのバケモンは！あんな奴見た事ねえぞ！」

「ああ、俺も初めて見る個体だ…」

「私も…」

未知の感染個体の出現に動揺を隠せない三人。

だがいつまでもこうして休んでる訳にもいかない、またいつ奴が現れるか分からないのだ。

「…とにかく一旦上に戻ろう、今の装備じゃアレはどうしようも出  
来ない…」

一先ず日を改めて装備を整えてから再度挑もう。そうオーウェン  
が提案すると2人も頷いた。

「よし！取り敢えず入り口付近に奴が居ないか確認しよう。居たら  
銃を撃って引きつける、居なかったらそのまま脱出だ！」

「了解…しかしアイツは何々だろうね？ひよつとしてアイツが最初  
の感染者なのかな？」

「かもな…まあ詳しいことは次の機会にでも調べれば良いだろ、  
なあ商人、商人？」

マニーが商人に話しかけるが返事が返ってこない、おかしいと思い  
回りを見渡す…

商人の姿はどこにも無かった。

「商人ンンンン!!」

三人はどこかに感染者が居るにも関わらず大声で叫んでしまった  
…

バシャバシャと水の中を歩く音が聞こえる。

「クソ…ついてないな…」

商人である。

彼はあの異常個体から逃げる際、床の崩落に巻き込まれ地下に落ちていたのだ。

幸い怪我はなかったが、アビー達とは逸れてしまった。

それにしてもまさかあんな化け物が出てくるとは思いもしなかったと商人は内心で愚痴をこぼす。

幾らこの世界の感染者が自分達の世界から見たら大したことは無いとはいえ、流石にもう少しマシな銃火器を用意すべきだった。

今あるのは除草剤の容器とハンドガンに捕獲用の麻酔銃のみだ、噴射機は地下に落下した時に壊れた。

「ともかくあの三人組と合流しないと…」

碌な装備もない自分一人じゃあつという間に殺されるだろう、そう思いさつきから地下を歩いているのだが一向に階段らしきものが見つからない…

「やはりすべて瓦礫で塞がれているのか…?」

あの感染者が暴れたせいかな、建物が古いからか、或いはその両方が

原因か、あらゆる道が瓦礫で塞がれていて通れない。

これ以上歩き続けていても意味はないだろう、そう思い自分が落ちてきた場所に戻る為踵を返す、運が良ければ三人が探しに来てくれるかもしれない。

「グオオオオオ!!」

「…オイ嘘だろう…」

落ちた場所に戻ろうとした商人が後ろを向くとあのバケモノがいた…

いつまで経っても獲物が捕まえられず苛立っているのか周りにあるもの全てを破壊している。

すぐさま離れた場所にある物陰に隠れ奴に気づかれない様に息を潜める。

医療機器や病院の壁などが破壊されていくのを見ながら商人は考える。

(どうする? 階段は使えない穴の下で助けを待つ事も奴の所為で出来なくなった、他の出口を探すにしても見つかる前に殺される…)

なら…此処でやり合うしかない商人は覚悟を決めた。

幸いにも奴は自分に気づいていない、商人は音を立てない様にゆっくりと物陰から物陰へと移り感染者に近づく…

「グウウウウ!!」

(まだだ…もう少し…)

感染者まで後2、3メートルといった所まできたが商人はまだ油断しない、この距離ではまだ遠い…

(あそこだ、奴が破壊した壁の瓦礫で丁度死角になっている場所、あそこからなら届く…)

商人はゆっくりと懐から除草剤の容器を取り出し蓋を開け、拾った大きめの容器に中身を注ぐ。

そう、商人は除草剤の原液を直接ぶっかけるつもりである…

自分でも何やってんだと思うがもうこれしか無い…

そしてついに目的の瓦礫に到着する、感染者は自分に背を向けてい



る。

そして…

(よし…！…今だ…!!)

商人は容器の中身を感染者にぶち撒けた。

## 20話

「ガツギイアアア!!!」

除草剤の原液を浴びせられ悲鳴をあげ暴れまわる感染者、浴びせられた部位は色褪せ枯れ始めている…

(流石アンブレラ社製…)

商人達が使用している薬品の殆どはアンブレラ社製品である、(正確にはその品の権利を買い取った別の会社だが…) ウィルスやらb.o.w等と違いまともな商品であり使い始める前は最大限の警戒をしていたが、他の会社の品とは比べ物にならない程の薬効を持つ物ばかりであった。

そしてこの除草剤もアンブレラ社の開発した物だ、類に漏れず効果が半端ではない。

のたうちまわり周囲にある壁や物を破壊しながら暴れている感染者、よく見ると原液をかけられた部分が色褪せて腐食し始めている。

(今なら逃げられるか…?)

続け様に除草剤の原液を浴びせながら商人は体を動かす、目指すは自分が落ちてきた場所だ…

「オオオオ!!!」

腐食した部分を手で押さえながらも追ってくる感染者、しかし明らかに足は遅くなっている、商人は懐から拳銃を取り出し脚に向かって発砲する。

「グアアア!!!」

放たれた五発の弾丸が膝に被弾し身体のバランスを保てなくなり地面に倒れる感染者。

ジタバタともがく様子を見下ろしながら

「頼むからもう起き上がらないでくれ…」

そう言うと商人は再び走り出した。

しばらくして目的の場所にたどり着いた商人、しかし来たはいいもののどうやって上がればいいのか考える。

(近くに踏み台になりそうな物は無い持ってきた荷物の中にロープはあるが引つかかりそうな場所もない)

「やはりこれしか無いか…」

そう呟くと商人は懐からプラスチック製の防犯ブザーを取り出す

そして防犯ブザーについていたピンを引き抜くと天井の穴に向かって急いで投げつける…

すると防犯ブザーから院内に響く程の音が発せられる。

(後はアイツらが来てくれる様祈るだけか…)

当然こんな事をすれば感染者達も集まって来てしまう、しかしだからと言って何もしなければ何れ死ぬ。

他に手段は無い、ダメで元々

商人は近くにあった薬品や資料が入っているロッカーの中身を全てぶち撒け中に隠れ大人しく救助を待つことにした。

「クッソ!!商人のやつ一体何処に行ったんだ!？」

「落ち着いて!」

「落ち着ける訳ないだろ!!」

商人と逸れてしまった三人は発電室の中で若干パニックに陥っていた

特に取り乱しているのは意外にもマネーであった

自分が情報を売り込みに行った為に友人である彼を危険に晒してしまっている

もし商人が命を落とす様な事があれば…

「おい、二人共静かにしろ」

オーウエンが言い争う二人に静かに話しかける

「何か聞こえないか？」

その言葉を聴き二人は耳を澄ませる、すると何処からかアラーム音が聞こえる

急いで扉を開けて走り出すマネー

アビーやオーウエンも急いで後を追う、音源を辿りながら走っていると感染者が何体か現れたが頭に目がけて弾丸を御見舞いする

しばらくすると床が崩落している場所に防犯ブザーが音を立てていた、それを見つけたマネーはブザーの警報を止め穴に向かって叫ぶ

「おい、商人無事か!？」

数十分後駆けつけた三人に寄って商人は地下から救出された…



## 21話

「…アンタ達一体何があったのよ…?」

感染者達の巣窟から帰還した四人組を目の前にしたノラの第一声はそれだった。

服はボロボロ、髪は乱れ、肌は擦り傷や汚れまみれ

仲間の元に戻るやいなやマスクを投げ捨てワクチンをカブ飲みしていた

ある程度落ち着きを取り戻した商人が口を開く

「最初の感染者らしき個体を見つけた、だが想像以上の化け物でな、逃げるのがやつとだった、一応ある程度痛め付けて撃退したがまたすぐに復活するだろう。」

上着を脱いでアルコールをぶっかけ消毒しながら地下で遭遇した奴についての情報を共有する

「二人の感染者に複数の個体が幾つもへばり付いて肉の塊になってな、弾丸がなかなか貫通しない、それでも撃ち続ければダメージにはなるが奴が倒れる前に音で別の感染者どもがやって来る」

「最悪ね…」

「オマケに場所が狭いから逃げるのが苦労したよ。」

二人の会話を聴いていたオーウエンが会話に混ざる

「複数人で挑んで倒せれば良いがあの怪物は地下からは出てこないだろ、地上ならw1fの部隊で撃ちまくって殺せるだろうが地下じゃそんなこと出来やしない。」

「待ち伏せはどう? 何人かで出口まで誘き寄せて。」

「来るとわかってるなら対処できるか…?」

「ちよつと待てストレンジャーズ一つ重要な問題事があるんだが」

商人は手を上げながら発言する、何やら物凄く言いづらそうだ

嫌な予感がする…

ノラとオーウエンだけでなく座り込んで休んでいるアビーとマニーも思った

「ワクチンを作る時には感染者を生かした状態にしとかなくちやいかん、材料となる菌の苗床にする訳だからな、だからやつからワクチンを作る場合生捕りが条件となるんだが…」

沈黙が一带を支配する、四人だけでなく周りにいた兵士達も動きが止まる。

数秒の沈黙の後全員が

『最初に言え!!!』

商人を怒鳴りつけた

水族館に車が止まる、W1fの車両が商人を送ってきたのだ

「じゃあな気をつけて帰れよ、進展があつたら報告する。」

「そっちもな、例の感染者についてはW1fでどうにか対処法を考えとくよ。」

別れの挨拶をして車が去るのを見届け商人は中に入る

すると中にいた仲間が自分に近づいてくる

「何だ？一体どうした？」

「今すぐセラフアイトの所に向かってくれ」

その言葉に眉を顰める

「預言者が危篤だそうだ、アンタの事を呼んでる」

島に到着し信者達に案内された家に預言者が横たわっている

呼吸が落ち着いている、苦しくは無さそうだった

「よく来てくださいました、アウトサイダー」

寝たきりの状態で預言者は声をかける

「まあ商人だからな、良客に呼ばればそりや来るだろう？」

商人の言葉に預言者は笑顔になる

「みんな」

預言者が呼びかけると周りの信者達が退出する

「あなたに渡したい物があります。」



「本日はありがとうございますございました、アウトサイダー」

預言者の葬儀を終えてすぐ信者の男が商人に話しかける

「あなたのおかげで預言者様は私達により多くの救いと導きを残してくださいました、あなたがいなければ預言者様はもつと早くに天に召されてしまったでしょう」

商人は黙って信者の男を見る

「どうかお礼を言わせてください、本当にありがとうございます」

(ああわかった、そう言う事か…)

商人は心の中で納得した、何故自分が彼女を気にかけていたのか…

“みんなをよろしく願います”

(同じだったからか…)

教祖と信者

支配者と家畜

何かの為に強要される立場、そんな姿が自分達と重なった

(ウチの元ボスとはえらい違いだな)

下の者達の為に一生を捧げるなんて事は天地がひっくり返ろうとも教祖サドラーなら絶対にならないだろう

商人は手に持った袋に目を落とす

それは預言者から渡された物だった、商人にそれを渡した時に彼女は懺悔するかの様に口を開いた

“私は知っていました”  
袋の中にはキノコが入っていた